

要旨

初期段階に言語の仕組みを重視するオーディオリンガル・メソッド(The Audiolingual Method)であろうと、その後の段階に言語の機能を注目するコミュニカティブ言語教授法(Communicative Language Teaching)であろうと、両方とも語彙は下位の目標と見なされ、あまり重視されていなかった。第二言語教育のシラバスについての議論は、主に言語の機能性と文法構造をめぐる、展開されている。語彙シラバスは、ただ学習の範囲を明示し、それにより学習の順序を定めているのみであり、外国語教育において、それほど重要ではないようである。しかし、言語運用の面から見れば、語彙は情報の伝達と対人コミュニケーションの基礎だと言える。第二言語教育の理念を體現し、教育の内容と順序を定める語彙シラバスは、第二言語教育においてより大きな役割を果たすべきである。

具体的に言えば、外国人に対する中国語教育の語彙シラバスについての研究には、以下のような六つの問題点が存在していると思う。

一、語彙シラバスに存在する細かい問題点をめぐって行われる討議が比較的が多い。たとえば、語彙の頻度の問題、多義語と品詞兼類の問題、学習レベル分けの問題、意義体系の完備性の問題などである。それらに比べれば、シラバスの編成原則と方法をめぐって行われる研究はまだ多くない。

二、外国人に対する中国語教育の語彙シラバスに関する研究が比較的少ない。過去 20 年の間に、権威のある語彙シラバスはただ二部だけである。つまり『漢語水平語彙与漢字等級大綱』と『漢語国際教育用音節漢字語彙等級劃分(国家標準)』である。

三、多くの研究者は成熟した言語教育理論の骨組みに入っていないことである。言語教育の指導シラバスは、一定の言語理論と教育理論に基づいて編成されて、言語教育を指導するものである。教育指導シラバスを研究の対象にする以上、言語教育理論でそれを支えなければならない。さもないと、語彙の教育指導シラバスには、理論根拠と系統性が不足になる。

四、具体的な教授法のもとで、教育実践におけるシラバスの有効性を検証した研究が不足している。教育語彙のシラバスは言語教授法を通じて、

言語教育に役立つ。教育指導シラバスの有効性は具体的な教育実践を通じて、検証されなければならない。

五、語彙シラバスの編成についての研究は、コミュニケーションの必要だけに着眼しており、中国語語彙体系の特徴を十分に考慮されない傾向がある。語彙体系は複雑なシステムである。このシステムは様々な単位“語素、詞、語”(日本語で形態素、語彙、チャンク)を含んでいる。語彙の構成と造語は自身の規律に従っている。多くの中国語の複合語は字(形態素)の意味関係に従って、作り出される。その規律がよく分かれば、語彙の理解と習得に役立つと思う。

六、ヒトの認知活動を支える柱の一つとして、受け取った情報をもとに有意なまとまりを作り出す能力がある。このまとまりをカテゴリー(category)という。それは認知活動の中でも、とりわけ記憶と学習に深く関わっている。カテゴリーを形成することは1つの概念を形成することであり、逆に概念を形成することは1つのカテゴリーを形成することでもある。語彙は概念を表す記号である。つまり記号化(encoding)することによって概念の指す範囲を区切り、それをそれと認定し、記憶・再生してコミュニケーションに活用できる。人とコミュニケーションするということは同じ記号で同じ範囲の概念を心に思い起こすことである。同じ範囲の概念に同じ記号を付けることはカテゴリー化ということである。カテゴリーを階層構造にすることができる。カテゴリー階層は語彙の習得順序と関わる。L1の言語習得の順序から言えば、一般的に基本レベルのカテゴリーの次が下位レベルのカテゴリー、最後は上位レベルのカテゴリーになる。ある物体を見せられたとき、通常人は基礎レベルの名前を言う。このレベルには認知の経済性と必要な情報量のバランスが最もよいレベルである。また異文化間で普遍性も高い。子どもがもっとも先に覚えることばは基礎レベルのカテゴリー名なので、基礎レベルのカテゴリー名は、第二言語教育における語彙教育にもっとも重要なものだと思う。また、言語間でカテゴリー化の基準が大きく異なる。このタイプの語は、意味領域ごとに異なる基準で概念を分割しており、何を基準とするかは、同じ意味領域でも言語が異なると大きく違う。故にこのタイプの語となると、学習しようとしているその言語の単語を、そのまま母語の単語に通訳するだけではなく、その言語のその意味領域ではどのように基準で概念が切り分けられるかというメタ知識が必要である。カテゴリー化と語彙習得に基づいて外国人に対する中国語教育の語彙シラバスを作成することと語彙を体系化するこ

とについて考えるべき問題である。しかし、この問題に関する研究はまだ多くない。

以上の問題意識と先行研究への考察を通じて、本研究では概念を中心とする語彙シラバスの作成理念を提出して、この枠組みの中でカテゴリー化と語彙習得、中国語の語彙体系上の特徴、第二外国語としての中国語語彙教育の視点から、新しい語彙シラバス構築のための視点を提供する。

「概念を中心とするシラバス(notional syllabuses)」では、言語を使って何をするかという行為を重視し、その言語が相互作用の一部として持つ働きである「伝達機能」が重視された(ウィルキンズ 1984、原著 1976)。シラバスを構成する概念の中には意味・文法範疇、法的範疇に加えて、「伝達機能の諸範疇」が設けられ、命令や勧誘などの範疇が示されている。そうすれば、言語教育を言語形式からではなく、概念に基づいて構成することができる。語彙教育の本質は、概念と目的語の言語形式を対応することである。伝達機能から考えれば、概念を中心とする語彙シラバスを構成する概念の中には意味・語彙範疇と伝達機能の範疇が設けられる。意味・語彙範疇というのは、異なる意味領域を表現する語彙であって、伝達機能の範疇というのは、同じ意味領域を表現する諸語彙である。これらの語彙は概念の内包と外延が異なっている。語彙力から言えば、意味・語彙範疇を「語彙の量」と称し、それに対して、伝達機能の範疇を「語彙の質」と称している。コミュニケーションの自由度は語彙力の「量」に、コミュニケーションの精度は語彙力の「質」に関わっている。仮にコミュニケーションにおける必要な意味領域が有限だとすれば、言語活動というのはそれらの意味領域を組み合わせ、表現したい情報を伝達することである。もし同じ意味領域を表す語彙を集めて、その中から一つの単語を代表にすれば、それらの代表的な語彙は語彙の概念体系を構成し、コミュニケーションにおける必要な概念を覆る。同じ意味領域における諸語彙は概念の内包と外延に差異が存在し、それによって言語の表現機能にも差異が存在する。学習者は、言語活動のニーズ、文法、文体、言語環境および言語以外の要素(聞き手との関係、表現したい感情と愛憎)などによって適当な形を選んでコミュニケーションすることができる。

概念を中心とする語彙シラバスを作成するため、中国語語彙の意味体系を構築しなければならないと考える。L2 語彙体系の構成では、文法範疇に基づき、名詞、動詞、形容詞、副詞など各自の語彙体系上の特徴によって

それぞれ組織化される。また各体系の意味関係に基づき、豊富な教育手段を利用し、第二言語における語彙教育に役立つと思われる (Miller and Fellbaum, 1991)。第二章と第三章はカテゴリー化と語彙習得、中国語の語彙体系上の特徴に着眼して、中国語の意味体系と語彙体系の構成をめぐって検討する。本研究における L2 語彙体系は広義的な上位・下位の関係によって構成される階層の構造である。それは二つの階層を含んでいて、「基礎の認知レベル」とその下位のレベルである。「基礎の認知レベル」は意味体系の構造の中核である。そのレベルは語彙を学び始める階層であって、最も多くの概念を含んでいる。そのレベルにおける語彙は日常生活によく使われる語彙である。語彙力から見れば、基礎の認知レベルにおける語彙は語彙力の「量」を構成し、その階層における語彙を全て習得すれば、スムーズにコミュニケーションができる。下位の階層は、同じ意味領域に関わる語群を含む。この語群は上位の単語(ある具体的な概念)の異なる表現形式だと理解することができる。語群は語彙力の「質」を構成している。

新しい中国語の語彙シラバスは、概念と語彙との関係を体現すると同時に、中国語の語彙体系の特徴も反映すべきだと思う。第三章は語構成、形態素と一字語の意味関係、形態素と複合語の意味関係、語とチャンクの意味関係の視点から、中国語の語彙体系を検討する。中国語の語彙体系は、語素(字)、詞、語など異なる単位を含んでいる。各単位の間、意味の関連性が存在している。語彙の構成は各単位との意味関係に深く関わっている。中国語の名詞、形容詞、動詞、副詞はそれぞれの特徴がある。全体から見れば、中国語の語彙は二つの特徴がもっとも重要だと思う。一つは形態素(字)と語は一つの連続体と見なすこと。もう一つは韻律制限のため、語に音節調整(一音節⇔二音節)が必要なこと。学習者にとって、これらの知識を把握すれば、彙を理解すること、覚えること、使用することに役立つと思う。

第四章はモジュールの形式によって、語彙表を作成する方法を提出した。モジュールは以下の部分を含んでいる。(1)異なる意味領域を表す言語形式(代表語);(2)同じ意味領域を表す異なる言語形式;(3)語を構成する形態素(漢字)。語彙の発展と変化に従って、その中のモジュールを定期的に更新することができる。同時に、教師も教育の目的、方法、内容、環境などの要素によって、自由に各モジュールを抜き取って、調整できる。

新しい語彙シラバスの教育実践における有効性を検証するために、終章では情報差タスク (information gap tasks)、観点差タスク (opinion gap tasks)、推理差タスク (reasoning gap tasks) など三種類のタスクに対して、具体的な教育の指導計画を設計する。それによって、概念を中心にする新しい語彙シラバスはタスク重視の言語教授法における有効性を検証する。

本研究には、以下のようにオリジナリティな部分がある。(1) 概念を中心にする教育語彙シラバスの編成理念を提起する。(2) カテゴリー化と語彙習得と中国語語彙の特徴の視点から、中国語語彙の体系を検討し、L2 中国語の語彙体系を構築する。(3) モジュール化したシラバスの編成理念を具体的な語彙シラバスの作成に利用する。(4) 具体例を通じて、語彙シラバスの教育における有効性を検証する。